

「明大商学論叢」論文執筆上の標準的注意事項

1. 文章は原則として、当用漢字、現代かなづかいを使用し、横書きとする。

(1) 外国の国名、地名、人名などは、漢字による表記が慣例となっている場合を除き、原則としてカタカナ書きとする。なお、一般化していない固有の名称（地名、人名、機関名、会社名など）は、最初に限りその原語（ただし、特殊な外国語の場合は、そのローマ字化したもの）をカッコ内に付記する。また読み方がはっきりしない人名、地名は原綴のままでもかまわない。

(例) *ソリージャ (A. Zorrilla) は..... ソリージャの指摘によれば.....
*産銅公社 (Corporacion del Cobre - 略称 CODELCO) が.....

(2) 外来語、外国（中国をのぞく）の度量衡および貨幣の単位は、カタカナ書きとする。

(例) コーヒー、ガラス、メートル、トン、ドル
ただし、パーセントは記号 (%) を使用し、図・表では一般的な単位は、記号 (m, g, t など) を使用する。

(3) 数字は、原則として算用数字を使用する。ただし、本文中ではコンマを用いず、万以上の数字には万、億、兆をもちいる。

(例) 23億0500万円（または 23.05 億円）、1万2000人（または 1.2 万人）、
第5表、0～5歳

(4) 「第一に」、「一貫して」、「第一次大戦」など熟語に入っている数字は、漢数字をもちいる。

(5) 継続を示す場合は ～ を使用する。

(例) 1970～74年、30～40%

2. 項目の区分について

大項目 ・, ・, ・, ・.....

中項目 1, 2, 3, 4..... (ゴシック体で)

小項目 (1), (2), (3), (4).....

細項目 (a), (b), (c), (d).....

文章の中の列挙は (1), (2), (3)....., (a), (b), (c)..... をもちいる。

ただし、特に希望のある場合は、他の区分方法をもちいてもよい。

3. 図および表について

それぞれ通し番号を付し、表題をつける。必ず単位、出所を明記する。
表について注記が必要な場合には、出所を示した後に続ける。

4. 注記について

(1) 注は脚注とし、通し番号を付す。注の原稿は各節、各章、あるいは本文の後にまとめる。
なお、参考文献は、必要に応じて、最終ページに記載する。

(2) 補足的な叙述にはカッコをもちい、カッコが重なるときはダッシュを使用する。

(例) *輸出商品(主要な一次産品‘たとえばゴム、スズ’と工業製品)は……………。
*50カバン^①(1 Cavan 1カバンは75リットル)……………。

5. 文献の引用表記について

引用文献、参考文献の表記には、下記の方式をもちいる。

(1) 邦文文献

a. 単行本

著者『書名』(シリーズ名), 出版社, 出版年(原則として西暦), 引用ページ。

(例) 岩田慶治『東南アジアのこころ』(アジアを見る目 30),
アジア経済研究所, 1969年, 104ページ。

b. 論文

執筆者「論文名」(編者『書名』, 出版社, 出版年) 引用ページ。

(例) 内田義彦「日本思想史におけるヴェーバー的問題」(大塚久雄編『マックス・ヴェーバー研究』, 東大出版会, 1965年), 99ページ。

c. 雑誌論文

執筆者「論文名」『雑誌名』巻号, 年月, 引用ページ。

(例) 吉村 励「国民教育権と大学の自治」『経済学雑誌』, 67巻4号, 1972年10月,
44ページ。

(2) 外国文献

*著者名は原則として姓名を倒置し、共著の場合は2人目からは倒置しない。

*邦訳のある場合はカッコ内に記述する。

a. 単行本

著者, 書名(イタリック), 版次, 出版地, 出版社, 出版年, 引用ページ。

(例) Samuelson, P.A., *Economics: An Introductory Analysis*, 6th ed., New York,
McGraw-hill, 1964, pp. 15-18. (都留重人訳『経済学—入門的分析—』, 岩波書店,
1966年)

b. 論文

執筆者, “論文名” in 書名 (イタリック), ed. by 編者名, 出版地, 出版社, 出版年, 引用ページ。

(例) Chakravarty, S. and R.S. Echaus, “Choice Elements in International Planning” in *Capital Formation and Economic Development*, ed. by P.N. Roseinstein Rodan, London, Allen & Unwin, 1964, pp.68-82.

c. 雑誌論文

執筆者名, “論文名”, 雑誌名 (イタリック), 巻, 号 (年月), 引用ページ。

(例) Locanathan, P.S., “Regional Co-operation and Development”, *Indian Economic Journal*, Vol.15, No.3(Jan/Mar. 1968), pp.39-40.

(二度目以後の引用について)

(1) 邦文文献

i. すぐ前に引用文献がある場合

同上書 (同上論文, ……誌, ……紙), 引用ページ。

ii. 間に他の引用文献がある場合

姓, 前掲書 (初出の注番号), 引用ページ。

(例) 安藤, 前掲書 (注5), 184ページ。

(2) 外国文献

(例) 5) Black, B., “A Generalization of Destination Effects in Special Interaction Modeling”, *Economic Geography*, Vol.59, No.1(Jan. 1983), pp.16-18.

6) Ibid, pp.20-23.

(例) Keynes, J.M., *The General Theory of Employment, Interest and Money*, Macmillan, p.30.

2) Mill, J.M., *On Liberty*.

3) Keynes, *op. cit.*, p.64.

(同一著者の著作が2点以上ある場合)

(1) 邦文文献

姓『書名』(または「論文名」を適当な長さに略), 引用ページ。

(例) 川田編「インドの経済と……」, 109ページ。

(2) 外国文献

Surname, Title, p. ……

(例) Shult, *Economic Crises*, ……., pp.8-15.

6. 文献の引用表記は, 論文末に引用文献を一括配列 (アルファベットまたは五十音順) し, それに一連番号または年号を付して, 本文では著者の姓とその番号または年号, および引用ページを [] 内に示す方法を使用してもよい。

(例1)

・・・, 近代経済学の学問的性格は「論理実証主義」(安井〔7〕)といわれる・・・・・・
なお, 近代経済学の検討については, Leontief〔1〕Mishan〔2〕などがある。

参考文献 (論文末)

- [1] Leontief, W., "Theoretical Assumptions and Nonobserved Fact", *American Economic Review*, Vol. 61, No. 1 (Mar. 1971)
- [2] Mishan, E. J., *Growth: The Price We Pay*, New York, McGraw-hill, 1969. (都留重人監訳『経済成長の代価』, 岩波書店, 1971年)
- [3]・・・・・・・・・・・・・・・・
- [4]・・・・・・・・・・・・・・・・
- [5]・・・・・・・・・・・・・・・・
- [6] 中山伊知郎「近代経済学について」『季刊理論経済学』, 22巻1号, 1971年4月。

(例2)

・・・近代経済学の学問的性格は「理論実証主義」(安井(1971))といわれる・・・・・・
「・・・仮説と事実の間にフィードバックが行われる。」(安井・碧海(1971))あるいは・・・
「近代経済学の 発展・・・・」(中山(1971) pp.123-125)。
なお, 近代経済学の検討については, Leontief(1971), Mishan(1969)などがある。

参考文献 (論文末)

- Leontief, W. (1971), "Theoretical Assumptions and Nonobserved Fact", *American Economic Review*, Vol. 61, No. 1
- Eishan, E. J. (1969), *Growth: The Price We Pay*, New York, McGraw-hill. (都留重人監訳「経済成長の代価」, 岩波書店, 1971年)
- ・・・・・・・・・・・・・・・・
- ・・・・・・・・・・・・・・・・
- ・・・・・・・・・・・・・・・・
- 中山伊知郎(1971), 「近代経済学について」『季刊理論経済学』, 22巻1号, 4月。

7. URLを言及する場合には、http・・・・・・を明記すること。

[出所：大阪市立大学経済学会『経済学雑誌』、但し7を除く。]

(完)